

ワルキューレ「三つの課題」

2022/01/01



新年明けの名古屋オペラサロンは、ワーグナーの《ワルキューレ》(全3回)の最後の講座で始まります。ここでは、「ワルキューレ三つの課題」についてお話しします。それは、「なぜ、ヴォータンは、指環奪還をあきらめて、神々の滅亡を望んだのか」「ワルキューレである娘のブリュンヒルデは、なぜ、神々の王であり父であるヴォータンの命令を裏切ったのか」「ヴォータンとブリュンヒルデは、次世代のジークフリートになにを期待していたのか」の三つです。すなわち、「ヴォータンの指環奪還は可能か？」を問うことです。このワーグナーの意図について、不信と期待を合わせもった、不安な21世紀を共に生きるオペラサロンのみなさまに、解説者の私が代わりに答えなければなりません。オペラサロンもまた、優れたオペラ環境に恵まれています。嬉しいです。

さて、その「ワルキューレ三つの課題」ですが、その答えは次のようです。

【課題1】 なぜ、ヴォータンは、指環奪還をあきらめて、神々の滅亡を望んだのか。

あくまでも「指環奪還」を望むヴォータンは、妻フリッカを説得します。

ヴォータン

今まで世に起こったためしのないことを私の心は求めてやまないのだ。
どうかこれだけは聞いてくれ！
神々の庇護を受けなくとも、神の掟を破れる英雄の存在が必要なのだ。
役に立つのは、その男(ジークムント)だけだ。

だが、このヴォータンの望みも、フリッカによって拒否されました。

フリッカ

妻である女神の神聖な名誉を今日こそ盾で守ってください！
人間に嘲笑われ、力を失えば、私たち神々は滅びていくわ。
でも今日こそは私の権利を、この元気な娘が立派に守ってくれるはず。
ヴェルズング(ジークムント)は、私の名誉のために死ぬ — ヴォータンはそう誓ってくれますね？

【答え1】 この「人間に嘲笑われ、力を失えば、私たち神々は滅びていく」というフリッカの言葉は運命的です。ヴォータンの意図が実現したら、この世は人間のものになってしまいます。このフリッカの言葉で、ヴォータンはそのことに気がついたのです。

人間に頼らなければ指環は奪還できません。でも、人間に頼ったら、この神の世界も力ある人間に乗っ取られてしまいます。どちらにしても、神々に黄昏が訪れることに違いはありません。フリッカに言いくるめられたヴォータンは、仕方なく、ジークムントを殺すことを誓います。

ヴォータン

誓う！

ここにおいて、ヴォータンの祈願である指環奪還の作戦は潰えたのです。神々は、ただ、終末を迎えるほかはなくなりました。この作戦を不可能にしたのはフリッカの正論だったのですが、それを可能にしたのは、アルベリヒの「愛」に対する呪いだったのです。

ヴォータン

私はアルベリヒの指輪を手に入れ、強欲にあかせて、財宝をも手に入れた！
だが、私が逃れたつもりでいた呪いは、今でも私をとらえて放さぬようだ。
愛するものを見捨てねばならず、愛する男を殺さねばならない。
私を信じる者を、偽りをもって、裏切らねばならないのだ！
消え去るがいい、神々しい輝きよ！
神の華麗に彩られた恥辱よ！

崩れ落ちよ、私が作ったすべてよ！
私はもはや事を成さず、望むことはただ一つだけ、終末！
終末だけだ！

【課題2】 ワルキューレである娘のブリュンヒルデは、なぜ、神々の王であり父であるヴォータンの命令を裏切ったのか。そして、なぜ、ヴォータンは、そのことに、激怒したのか。

【答え2】 ブリュンヒルデは、父ヴォータンの本心を知って、命令よりも本心に従おうと思ったのです。でも、裏切られたヴォータンの怒りは、驚くべきほど激しいものでした。

ヴォータンはその怒りを、次のように言って正当化します。娘のブリュンヒルデは、「自らの意志そのものなのだ」というのです。娘の意志が入り込んだり、間違ったり、逆らったり出来るものではありません。そうはいかったことに、ヴォータンは腹を立てているのです。

ヴォータン

私の心に秘めた想いを、この子ほど知っている者はいなかった。
私の本当の意志をこの子以上に知る者はなかった！
ましてや、私がこの世に望みをつないだ理由も、この子がいたからこそだったのだ。
それなのに、この子は幸福な絆を断ち切り、不実にも私の意志に逆らい、私の命令を公然と嘲笑い、私に武器を向けたのだ！
この子の幸せを願って、私が作った武器を。
聴こえるか？ブリュンヒルデ！
お前に鎧を、兜と武器を、喜びと慈愛を、名前と身体とを与えたのは、この私ではなかったか？
そんな私の嘆きの声を聴きながら、お前はおびえて身を隠し、卑怯千万にも罰をまぬがれようというのか？

ブリュンヒルデ

お父さま、私はここにいます。罰を下してください！

ヴォータン

私が罰するのではない、お前自身がお前を罰すればよい。
お前は私の「意志」によってのみ存在していたはずなのに、
私に逆らう意志を持ったではないか。
私の「命令」を果たす立場だったのに、私に逆らう命令を出したではないか。
お前は「望みの乙女」だったはずなのに、私に逆らう望みを抱いたではないか。
私の「盾」となる女だったはずなのに、その私に盾ついたではないか。
私の意にそって「運命を決める」女だったはずなのに、
私に逆らって運命を決めたではないか。
勇士の「心を動かす」立場だったのに、私に逆らうよう勇士を動かしたではないか。

かつては、お前のあり方は、ヴォータンが決めていた。
だが、これからのお前のあり方は、お前自身が決めればよい！
もはやお前は「望みの乙女」ではない。
かつてはヴァルキューレだったかも知れないが、
これからはどのようにでもなればよい！

ブリュンヒルデにはブリュンヒルデの言い訳があります。父ヴォータンの本当の願いは、指環奪還にあるのではなく、人間ジークムントを「愛している」ことを完成させることでした。その「愛」が、アルベリヒの呪いによって滅びないように死守するのがヴォータンの願いだったのです。ブリュンヒルデも、ジークムントの「愛」を知り、ジークムントとジークリンデの「愛」を守ろうとしたのです。このことは、神々の王ヴォータンの心の秘密でした。その秘密を、妻のフリッカだけではなく、娘のブリュンヒルデにまで知られてしまったのです。

神の不文律

神には神の、してはならない「不文律」（言葉や文章になっていない暗黙の了解事項）があります。ここでのヴォータンがつぶやいた、神としての「秘密」は、初めて私たちに知らされる事柄です。この「秘密」が分からなければ、ヴォータンがブリュンヒルデを厳罰に処する意味が分からなくなります。

ヴォータン

口に出してしまえば、私は、自分の意思を露わにし、私に課せられた「秘密」の縛めを解いてしまうのではなからうか？
言葉で誰にも言えないことは、永遠に語られぬままでなければならぬ。

それで、ヴォータンは、指環奪還に人間を使うという「禁じ手の秘密」を知ったブリュンヒルデに激怒したのです。

ブリュンヒルデ

私は知恵の回らない娘です。
ですが一つだけ知っていたことがあります。
それは、お父さまがヴェルズングのジークムントを愛していたこと。
そのことをすっかり忘れねばならないという
引き裂かれる気持ちが、私に伝わりました。
お父さまはご自身の意に反して、事を進めていたのです。
そうだと認めることはあまりにもつらすぎたのです。
お父さまがジークムントを守れないということは。

ヴォータン

そこまで分かっていたにもかかわらず、あの男を守ろうとしたのか？

ブリュンヒルデ

私がそうした理由は、「それ」を見たからです。
お父さまは、別のこととの板挟みになって、
「それ」に仕方なく目を背けざるを得なかったけれど。

いつも戦場でヴォータンの背中を追いかけていた娘は、今初めて、お父さまが見なかったものを見たのです。
あの「ジークムント」を、私はこの目にしたのです。
私は、彼に死を宣告するために歩み出て、その瞳を見つめ、声を聴きました。
心の底からの苦難の声を聴き、比類なき勇者の嘆きを耳にしたのです。
ああ、最も自由な恋愛が直面した恐ろしい苦悩。
最も悲痛な心情が企てた力強い反抗！
そのとき、耳に残り、目に焼き付いたもの。
それは深く心に突き刺さり、存在の底の底から、私を揺さぶったのです。
恥ずかしさのあまり呆然として、私は立ち尽くしました。
この人の役に立とうとしか考えられなかったのです。
勝利でも死でも、ジークムントと分かち合おう。
私が選び取るべき道はそれしかありませんでした！
この愛を、私の心に注ぎ込んだもの。
私をヴェルズングと共に戦わせたもの、それはお父さまご自身の思い。
その思いを胸に抱きしめ、私はお父さまの命令に逆らったのです。

ヴォータン

そうか、お前は私が望んで果たせなかったことをしたわけだな。
苦しみに引き裂かれる私にはできなかったことを。
だが、心の歓びをそんなに簡単に手に入れられるとでも思ったのか？
私はどうなる、心を悲しみに焼き尽くされた私は。
つらい苦しみが打ち続くあまり、憎悪ばかりが膨れ上がって、苦しみ病める心で、世界が「愛」へと向かうことを妨げている私は。
自分自身の現実の姿に死ぬほどあらがいつつ、気が狂いそうな苦痛のために、激昂して立ち上がり、狂わんばかりの憧れに浸りながらこの世界を木っ端微塵にすることによって、永遠に続く悲哀を終わらせようという恐ろしい願いをもてあそぶ私は。
そんな私を横目に見つつ、お前は甘い歓びに浸るのか。
歓びの到来に陶醉するあまり、お前は笑って愛の薬を飲むというのか？
私の身を神々の危機がむしばむこの時に。
お前はそんな軽薄な女だったのか。
ならば勝手にやればよい、私との絆はもう断たれたのだから。
もうお前と一緒にいることはできない。
お前と二人で色々な思いをめぐらすことも、もうできない。
これからは離れ離れになったまま、何一つ共にはできないのだ。
この生が続く限り、この空が続く限り、お前と私とが、再び会うことはないのだ！

新たな誓いを守る

内心は嬉しいはずのヴォータンでしたが、神の威厳がそれを許しません。一度(ひとたび)、相手が妻のフリッカだったとしても、新たな誓いを立てたからには死んでもそれを守らなければなりません。自分の計画を捨て去ることは神々の長として屈辱的なことです。でも、誓いを破ることも、それ以上に屈辱的なことであります。結局、ヴォータンは、自分の命令を破ったブリュ

ンヒルデを厳しく罰せざるを得ないのです。

それに、このときにはまだ、ヴォータンはジークフリートの誕生を知りません。全能の神であるヴォータンにしては手抜かりでした。ジークフリートは、ジークムントとジークリンデの愛ある二人から生まれた「愛の子供」です。ヴォータンが望んでいた「愛の復活」です。愛を断念するアルベリヒの呪いに、正面から対抗するものです。ここに希望が生まれ、ジークフリートによって神々の没落を防ぐことが可能になったのです。でも、その喜びは、ヴォータンには、ブリュンヒルデにも、まだありません。

【課題3】 ヴォータンとブリュンヒルデは、次世代のジークフリートになにを期待していたのか。

【答え3A】 ヴォータンは、ジークフリートには、神々の「約束＝契約」の束縛から離れた「自由」な存在であることを期待しました。契約に縛られないジークフリートなら、正当な所有者である巨人ファフナーから、指環を武力でとりあげても構わないからです。

ヴォータン

私は、一度契約したことに私は手を触れることができない。

契約の前には、私の気迫とて無力なのだ。

これは私を縛るための縛りで、私は契約により支配者となっているので、その契約の前には、奴隷にすぎないのだ。

だが私には許されないことを、ある者だけは行えるかもしれぬ。

その者は、私が決して手助けすることはなかった勇者で、神とは無縁で、その恩寵を受けず、無意識のうちに、誰の命令も受けず、己の必要に迫られ、自らの武器を持ち、私には行いえない行為をなしとげるのだ。

決して私の助言を受けての行為ではない。

もちろん私の心はそれだけを願っているにせよ！

神である私に逆らいつつも、私のために戦う勇士。

友であり敵、そんな勇士を私はどうやって見い出せばよいのだ？

自らの反抗によって、私にとって最も親しき友となるべき者を、どうやって、私が庇護しない自由な者を生み出せばよいのだ？

私が望むことだけを自らの意思で行う者を、どうやって私自身にほかならない別人を作ればよいのだ？

ああ、神々の危機、おそろしい恥辱！

手に触れるものすべては、未来永劫、吐き気を催すばかりだ。

なのに、私が望んでいることは、何一つ決して視界に入ってくることはない。

なぜなら、自由なる者は自ら生まれ出てこなければならぬが、私が作り出す者は、ただの奴隷にすぎないからだ！

ヴォータンの望んでいた未知の「存在」としてのジークフリート

ジークフリートは、ジークムントとジークリンデという人間の夫婦から「自ら生まれ出てくる者」です。神々の束縛から「自由なる者」です。そしてそ

これは、「愛の子」です。アルベリヒが、愛なくて、直接人間の女に生ませた子供ハーゲンとの違いです。その意味では、ジークフリートの存在はヴォータンの望んでいたものでした。神とは関わりを持たないジークフリートが、大蛇を殺して指環を奪還しても、何のお咎(とが)めも、罪もありません。ハーゲンは、力では、とてもジークフリートには敵いません。「ジークフリート」の名前の意味は、「勝利をことほぐ者」という意味です。類い希なる勇者です。命名者は、ブリュンヒルデです。勇者のジークフリートから指環を奪おうとするハーゲンは、卑怯にも、後ろから槍で突いて殺すしか方法はなかったのです。でも、ハーゲンには、指環奪還以外にも、ジークフリートを殺す大義名分はありました。ジークフリートは、ブリュンヒルデと結婚をしながら、グンターの妹で、ハーゲンの腹違いの妹のグートルーネと偽りの結婚をしたからです。重婚罪です。それは、ハーゲンに媚薬を飲まされてだまされた結果であったとしてもです。ジークフリートは、結婚の契約を破ったのです。ここでもまた、結婚の女神フリッカとの「契約」が、人間界にも力を持っていることを示しているのです。

ブリュンヒルデの夫としてのジークフリート

ヴォータンは、ブリュンヒルデの夫としてジークフリートを選びました。ヴォータンは、ここでも、「ジークフリートは神々の契約からは自由である」と強調します。

ヴォータン

花嫁を守る炎よ、燃え盛れ！

乙女を求めるとんな若者も見ることがないほどに岩山を取り巻け。

焼き尽くし、燃やし尽くして、弱い者が近づけないようにするのだ。

弱き者は、ブリュンヒルデの岩山に近づいてはならない！

なぜなら、この花嫁を手に入れる者は、神である私より、もっと「自由」でなくてはならないからだ！

【答え3B】 ブリュンヒルデは、ジークフリートに、夫としての「愛」を期待しました。そして、人間の英雄としての「名誉」も期待しました。ジークフリートは、その通りの人間でした。でも、ジークフリート自身、ヴォータンやブリュンヒルデやジークムントやジークリンデのような「愛」を知っていたかどうかは、分かりません。

ブリュンヒルデ

ほんとに、こんな愚かな娘は何のお役にも立てませんでした。

お父さまに何を教わっても、ただ驚くだけで、まるで学び取れなかったのですから。

でも、私が学んだことが、たった一つだけあります。

それは、あなたが愛したものを「愛すること」です。

私は追放され、もうお会いすることはできませんが、お父さまのほうも、今まで体の一部だったものを捨て去り、遠くに半身を置きざりにするよなものなのですよ。

かつてはお父さまの一部分だった私という存在を。

お父さま、神よ、それだけは忘れないで！
お父さまの永遠の半身である私を辱めないで！
お父さまご自身の屈辱を望まないで！
恥辱に沈む私を見れば、お父さまの身も辱めることになるのですから！

ヴォータン

お前は、愛の力に屈したのだ。
ならば、お前を愛する定めの男には、誰であれ従うほかないのだ！

このヴォータンの言葉は重要です。ブリュンヒルデは、ジークムントのジークリンデに対する「愛」に感動してこの兄妹を助けたのです。それはヴォータンの望むところでもありました。それで、ジークムントによる指環奪還の望みは潰えたものの、ブリュンヒルデには「愛」を得させてやりたいと思ったのです。それが、たまたま岩屋を通る、行きずりの男なのです。そのことを知ったブリュンヒルデはヴォータンに頼みます。

ブリュンヒルデ

私がヴァルハラを離れ、もうお父さまとは行動を共にできず、この先は人間の男に仕えねばならないとしても、決して口先だけの卑怯な男には与えないでください。
私を手に入れる男が、無価値な男でないようにしてください。

ブリュンヒルデもまた、ジークムントのような英雄を夫に望んだのです。

この三つの課題から分かることは、ヴォータンは、自らの威厳を保つためにブリュンヒルデを厳重に罰し、指環奪還をあきらめたということです。そして、神々の終末を、ただ、座して待っているだけになりました。ジークフリートの誕生を前にした二人には、まだ、希望はみえません。

都築正道